

授業づくりをこうマネジメントする

連載(第8回)

関西外国語大学

中嶋洋一



負のサイクルをプラス向きにするには何が必要だろうか。教師の信念や自負心、コメント、子どもたちの声や感想などから考えてみたい。

① 子どもの声や感想を知る

友呂岐中学校では、同僚や学年全体が組織として機能している。また、授業では「協同学習」を展開して、仲間とともに学び合う喜びを与えている。それを伝える言葉がある。吉田先生の授業を終えた生徒たちの「振り返り」である。

- 頑張ろうと思うことが増えた。
- 信頼されたことで信頼できるようになった。
- 「相談」の意味がわかった。
- 「出口のないトンネルはない」ことがわかった。
- 努力は必ず報われることがわかった。
- 積み上げの大切さを知った。

● 「感動」はするの、させるのもすばらしいことだと思った。

● 最後に一人に残ることは決して恥ずかしいことじゃないと実感できた。

● みんなの拍手がとっても嬉しく感じられた。

● やるべきことをしっかりとやりとげることが当たり前なことだと気づいた。

② 教師は「コメント」で育てる

創作ダンスの練習中、生徒が辛くなつてつい楽を求めようとするとき、容赦なく吉田先生の声が飛ぶ。

「どないすんねん? やんのか、やらんのか?」

「そんなんのために今まで練習してきたんか?」

普通なら、ここまで言われたら心が折れそうになるだろう。だが、誰一人として諦める生徒はい

ない。皆で励まし合いながら切磋琢磨する。

吉田先生は常に生徒たちの疲れやストレスを感じとり、絶妙のタイミングで言葉をかける。あるときは厳しく、またあるときは温かく。

「ほーっと突っ立ってないで、人のために時間を使いなさい!」

「めっちゃめっちゃきたないで。気拔くな!」

「主人公は、私という気持ちで踊りなさい!」

生徒が少し行き詰まったときの声のかけ方も絶妙だ。

「いいよ、実力知ってるから。挑戦することに意味がある。さっきの自分を越えなさい!」

「自分を諦めない。粘ることに意味があるんやで!」

「今の天気を変えるくらい笑顔で!」

負のサイクルをプラス向きに変える

—11月の問題提起を読み解くために—



「はい、二重丸！合格」「はなまる！」授業の最後には子どもたちを集めて丁寧に意味づけ

「○○さん、もうちょつとやで」「よし、ブリッジができるようになってきたで！」「合格まであともう少し！」「手が曲がってる！」「そろっていいない！手を抜くな！」「できたときはとことんほめる。」「できたやん！」「ブリッジ率がったな！よくなってる」

る。

「大変だったことがあるから、感動につながるのです。無駄なことなど何もないですよ」

「あなたたちが感動できれば見ている人の心も動きます」

彼女はリーダーも育てている。時には厳しく責任を追及する。しかし、終わってから彼女たちにかけるねぎらいの言葉は温かい。彼女の期待を知らせ、使命感を与えている。

③ 教師の信念と自負心が鍵に

厳しくすることが「愛情」なのではない。彼女の考える「厳しさ」とは、ゴールを明確にし、見通しを与えること、途中で妥協させずに全員でそれを目指すことである。

そして、「愛」とはそこまで責任をもって全員を到達させることである。生徒に自信をつけさせる

ためなら、丁寧に最後まで鍛えていく。

彼女の厳しさの裏には「感動で終わらせてやりたい」「ダンスを通じて自信を持たせたい」という願いがある。仲間と共にこたわり抜いたその先に、全員が輝く姿があることを知っており、そこまで連れて行きたいという強い信念がある。それは、今まで何度も最後の「歓喜の瞬間」に立ち会ってきたからこそ生まれた揺るぎない自負心でもある。

だから、彼女には「これぐらいでいいか」という発想はない。手間隙をかけることを厭わない。教科通信もすべて手書きだ。

次回は、なぜ吉田先生がこのような考えをもつようになったのか、なぜ異動した学校を立ち直らせていくのか、その指導の秘密を探っていくことにする。